

## 3 日本地震工学会 原子力安全のための耐津波工学の体系化に関する調査委員会

### 3.1 報告書の執筆用フォーマット（耐津波工学委員会）<sup>1</sup>

#### 3.1.1 1～3 章用フォーマット

##### (1) 用紙のサイズ, 余白など

用紙サイズは A4 版として, 上下左右の余白を 25mm, ヘッダー・フッターは用紙端から各々 15mm, 15mm とする。ページは 1 段組, 行数は 45 行を基本とする。

##### (2) 題目

タイトルは 12pt のゴシック体を用いて左寄せで記載する。スタイルは, 「表題」で設定する。次に項番号が続く場合, 1 行改行して記載する。なお, 項番号は報告書構成案に従う。

##### (3) 原稿の長さ

各章平均の目安=20 ページ。ただし, 執筆のスタイルを想定するための目安。章による増減は許容。

##### (4) 本文と見出しなど

###### 1) 本文

本文のフォントは 10.5pt として, 漢字・仮名は明朝体 (MS 明朝相当), 英字・数字は Roman 体 (Times new Roman 相当) とする。また, 句読点は「, 」と「。」を用いることとする。半角カナは使用しない (文字の間隔を詰める必要がある場合, その文字を選択し, 書式→フォント→文字幅と間隔のところ, 倍率で調整する)。また, 英数字も全角は用いず, すべて半角文字として入力する。段落間にはスペースを空けない事とする。

ギリシャ文字は全角の  $\alpha$ ,  $\beta$  などは用いず, フォント「Symbol」を用いて,  $\alpha$ (a を入力),  $\beta$ (b を入力) のように入力する。

スタイルは, 基本的には「本文」, 場合によって「本文 2」「標準」を用いる。

###### 2) 見出しなど

見出しのフォントは, ゴシック体 (日本語は MS ゴシック, 英字は Arial, Helvetica) を用いる。章では, 前後に 1 行の空白行を入れる。

節や項の小見出しでは, 改行してすぐに本文を続ける。

見出しは, 次のような順番とし, ①, ②のような丸数字は使用しない。例にあるように, 数字を入力した後, Tab で見出し文字列の書き出し位置までずらすものとする。

###### 1. 見出し 1 (章)

###### 1.1 見出し 2 (節)

###### 1.1.1 見出し 3 (項)

(1) 見出し 4 各項で順番に 1 から番号が付くスタイル。項より細かく分けたいときには, 1.1.1.1 のように 4 つの数字を並べると見にくくなるので, このスタイルを用いる。

---

<sup>1</sup> 原稿締切は 2014 年 3 月末。

- 1) 見出し 5 3章では、幾つかの項で更に細かく章立てられている。この場合、見出し 5 を用いて執筆するものとする。

箇条書きは、1), a)などを用い、スタイルは本文と同様とし、必要に応じて字下げをする。スタイルは「箇条書き」を用い、箇条書きの同じ領域で改行をしたときには、スタイル「箇条書きの継続行」を用いる。

#### (5) 数式

数式は必要なものに限定し、誘導過程等詳細は参考文献に。但し、必要な場合は、以下のとおりとする。

- 1) フォントサイズは 10pt (本文より, 0.5pt 小さい)
- 2) 式の前後には 1 行の空白行をもうける。
- 3) 式は中央に印字する。式番号は右寄せとする。なお、式番号は各執筆範囲で(1)から始める。
- 4) スタイル「Equation」を用いるときは、Tab キーを押し、式を入力し、その後 Tab キーを押し、式番号を入力すると、書式通りの形式となる。

$$V_n = P_w \sigma_v b_j \cot \phi + bD(1 - \beta)v_0 \sigma_B \tan \theta \quad (1)$$

#### (6) 図・写真・表

概念の説明に有用な図・写真を積極的に用いる。 図・写真の番号やタイトルはその直下に、表の番号やタイトルはその直上にそれぞれ 10pt のゴシック体で記入する。図・写真および表の番号は、各執筆範囲で図 3-1, 写真 3.1-1, 表 3.1.1-1 のように章、節、項毎に振り付ける。なお、図、写真および表の左右には、文字を挿入しないことが望ましい。図、写真および表は本文から 1 行空けた後に貼付する。なお、図・写真等は、原則モノクロとする。但し、グラフなどでモノクロ表示では概念の説明が不足する場合は、カラー表示としてもよい。

表 3.1.1-1 鉄筋の材料特性 (例)

直径	降伏応力 MPa	引張り強度 MPa	破断伸び %
D10	404	629	14.0
D22	517	674	17.8
D25	534	685	18.0

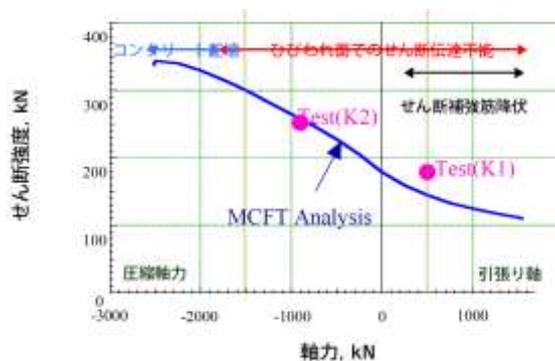


図 3.1.1-1 せん断強度と軸力との関係 (例)

注) 図表中の文字は本文と同様、日本語は明朝系、英字は Roman 系のフォントを用いるが、上の図のように、他の論文から引用するときなどは無理に変える必要はない。

#### (7) 変数, 記号, 単位

変数等の記述は、JIS Z8301:2008, 規格票の様式及び作成方法, JIS Z8201: 1981, 数学記号に従うことを原則とする。主な注意点は以下のとおりである。

- 1) 単位を表す文字 (m, kN など) は立体
- 2) 変数はイタリック
- 3) 上記 JIS では、添え字は立体となっているが、本ロードマップでは、添え字は変数を斜体、数字を立体とする。また、関数は常に立体である (sin, cos, exp など)。max は関数で用いるときには立体であるが、最大値を表すために添え字で付いているときには斜体である (例,  $\max(a,b)$ ,  $G_{max}$ )。
- 4) 単位は SI 単位とする。加速度を表す Gal は用いてよいが、小文字の gal は用いない。また、速度を表す kine も使用しない。応力では  $\text{kN/m}^2$  の代わりに kPa を用いる。

なお、他の出版物からの引用の際には、無理に単位系を変更する必要はない。なお、これらの図中の数字を本文で引用する際には、図中の数字を挙げ、その後に括弧付きで SI 単位による値を入れる。例えば、10kine (0.1m/s) のように記述する。変換の際に重力加速度の値が必要なときには、9.8 または  $10\text{m/s}^2$  等を用いる。

#### (8) 参考文献

フォントは、10pt, 日本語は明朝体 (MS 明朝), 英字は Roman 体 (Times new Roman) とする。使用した順に番号を振って、最後にまとめて記載する。(番号は、各執筆者の担当範囲で付番する。)

記載内容は、著者名 (姓名) : 題名, 掲載紙名, 巻, 号, 掲載ページ, 発行年等とする。最後はピリオドを付ける。英語表記の時, Vol., No., pp.の後に半角のスペースを入れること。

##### 参考文献

- 1) Paulay, T.: Moment Redistribution in Continuous Beam of Earthquake Resistant Multistory Reinforced Concrete Frames, Bulletin of New Zealand National Society for Engineering, Vol. 9, No. 4, pp.205-212, 1976.
- 2) 久保哲夫, 小原明: 連成するRC造骨組の終局時の変形と水平力分担に関する研究 (その1), 日本建築学会大会学術講演梗概集, Vol. C, pp. 719-720, 1987.

**URL による引用:** インターネット上の資料を引用する場合、URL と確認した日付を明示すること。

**参考資料:** 本文の記述を補足するための参考資料を付してもよい

注) 著作権・著作権の扱いは、以下の方針を進める。

1. 必要な場合は、原則執筆者本人が、先方から引用の許可を得る。
2. 地震工学会からの正式な依頼文書が必要な場合、地震工学会事務局に連絡する。(事務局への連絡は、東幹事がとりまとめ、まとめて連絡する。)

#### (9) 使用ソフト

報告書執筆に使用するワープロソフトは、Microsoft Word を基本とし、バージョン 2003 以前で保存するものとする。

#### (10) 執筆者名

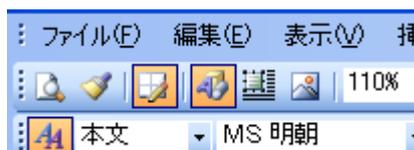
執筆者名は、文末に括弧付きで表記 (名前) する。なお、ここでは所属の記載は省略し、委員・

執筆者一覧を報告書内に一括掲載するものとする。また、フォントは10.5pt のゴシック体とする。

(地震 太郎, 工学 次郎)

### 参考) スタイルについて

このテンプレートには多くのスタイルが割り当てられています。Word 文書の左上に以下のような部分があります。この本文と書かれたところがスタイルです。その右の▼を押すことによってこの報告書で使うスタイル一覧が表示されますので、適当なものを選んでください。スタイルを使用することによって本文のスタイルが統一され、見やすい報告書となります。



現在のスタイル↑

↑スタイル選択

個々のスタイルは、下表のようになります。

本文を書く際に使用するのは、「本文」です。行間が固定されており、また、最初に1文字の字下げがしてありますので、段落の最初にスペースを入力する必要はありません。字下げが不要なとき（例えば、式の後で、段落を続けたいとき）には「本文 2」を用います。一方、図などを張り込み、それとともに行間を自動的に大きくしたいときには「標準」を用います。

見出しは、章、節、項と順番に「見だし 1」「見出し 2」「見出し 3」を用います。また、それよりも細かい章立て用に「見出し 5」まで作ってあります。これらは、章などの番号を入力した後、「タブ・Tab」を押したあと、見出しの文字を入力します。なお、箇条書きの際には箇条書きと箇条書きの継続行を用います。

スタイル名	用途	インデント	字下げ	ぶら下げ
表題	タイトル			
標準	図など	なし	なし	なし
本文	通常の記事	なし	1字	なし
本文 2	式の後など	なし	なし	なし
図表番号	図表のキャプション	なし	なし	なし
文末脚注文字列	参考文献	なし	なし	
箇条書き	箇条書き	なし	なし	1.5字
箇条書き継続行	箇条書きの継続	1.5字	1字	なし
見出し 1	章	なし	なし	7.5mm
見出し 2	節	なし	なし	10.5mm
見出し 3	項	なし	なし	3.4字
見出し 4	(1)のような所	なし	なし	15mm
見出し 5	1)のような所	なし	なし	8mm
Equation	数式	なし	なし	中央揃え

以上